

難波西鶴と

海の道

【82】

森田 雅也

前回までは江戸時代の「敵討」の実態についての話でした。ふたたび、西鶴

の『武道伝来記』『貞享4(1687)年刊』巻四の「二」誰捨子の仕合」の話に戻ります。

九州島原港の無法者、辻岡角弥の目に余る行状に、ついに榎崎茂右衛門、矢切団平の両名に、「辻岡角弥」上意討ちの命が下ります。両名は「辻岡角弥」を見事討ち果たしますが、団平は茂右衛門をその場でたまたし討ちにし、手柄を独り占めにしてしまいます。団平は角弥と茂右衛門が相打ちに

なつたと偽装し、そのように検分されると、大手柄と賞賛され、名声と加増を得、家は栄えます。

一方の茂右衛門は、ふがいなくも討たれたと不評を買い、冷遇され、家に子もないことから、ついに断絶。妻は曰く、その夫の武道が後れをとったことに不審をいだきながらも、21歳の若さで出家し、残された家財道具もすべて兄茂左衛門の手に渡ってしまいます。

さて、その悪事で栄えた団平ですが、世間に評判がよいことから思い上がり、次第に「う慢な主人となり、使用人たちから恨まれ、使用人たちが、特に家

来の若党の「九市郎」の場合、ある時、枕屏風の張り替えを命じられたところ、その張り方が悪いと団平に激しく叱責された上、け飛ばされます。「いくら主人でも」と、九市郎が不満の顔つきになると、さらに団平の怒りを買い、武家長屋に押し込められ、もつとひどい目に遭わされ、近日に打ち首と決まりま

す。同じ屋敷に、かねてこの九市郎と言い交わし、夫婦の約束までしていた「久米」という腰元がいました。久米は長屋の窓まで忍び行き、九市郎と悲しい思いを語り合います。その時、九市郎は、さほどの罪もないのに死罪を受ける無念を嘆くとともに、主人団平の人格を非難します。そして、元来、武道の心得もなく、ひきょう者の団平の家が栄えたのも、先の「辻岡角弥」上意討ちの際に、榎崎茂右

家来に恨まれ、逐電

衛門をたまたし討ちにしたからだと事の真相を告げます。

さらに九市郎は、この事件の真実を榎崎茂右衛門の兄茂左衛門に告げ、主人団平を討つてもらおうようにしると久米に言い残して、手討ちにされます。久米は九市郎の言いつけに従い、榎崎茂右衛門の兄茂左衛門の屋敷に駆け込み、事の次第を一部始終話した後、みずから自分の舌をかみ切つて死にます。まさに貞女、烈女ですね。この顛末はあつという間に評判となり、団平は逐電します。

藩でも調査し、まず、この上意討ちの検分をした役人に怠慢を罪として切腹させます。兄茂左衛門は「敵討」となるのですが、目下の敵は制度として討てません。どうなるのでしょつか。次回にて。

(関西学院大学文学部文芸学言語学教授)

悪事でも栄えた団平の運命は